

司 式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏 楽 杉山友実子姉

開 会 招 詞 詩篇95：1-7

* 賛 美 歌 6：1 (ソングシート)

1. 我らのみ神は天地すべます、国々しまじま 喜びたたえよ。 アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。 主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 49：1

1. 天なる喜び こよなき愛を 携え降れる 我が君イエスよ
救いの恵みを あらわに示し、賤しきこの身に 宿らせ給え。アーメン

公 同 の 祈 禱 6 ニケア信条

我らは、唯一の全能の神、天と地と、すべて見えるものと見えざるものとの創造者を信ず。
我らは、唯一の主、神の独り子、イエス・キリストを信ず。主は、あらゆる世のさきのみ父より生まれ、神よりの神、光よりの光、造られずして生まれ、み父と同一の本質にいます真の神。万物は彼によりて造られた。主は、我ら人間のため、我らの救いのために天より降り、聖霊によって処女マリアより受肉して人となり、我らのために、ポンテオ・ピラトのもとに十字架につけられ、苦しみを受け、葬

られ、^{せいしょ}聖書に^{したが}従って三日目^{みつかめ}によみがえり、^{てん}天に^{のぼ}昇り、^{ちち}み父の^{みぎ}右に^ざ座し、^い生ける^{もの}者と^し死ねる^{もの}者とを^{さば}審くために、^{えいこう}栄光をおびて^{ふたたび}再び来たりたもう。その^{みくに}御国は^お終わることがない。我らは、^{せいめい}生命の^{あた}与え^{ぬし}主にして、^{しゅ}主なる^{せいれい}聖霊を^{しん}信ず。聖霊は^{ちち}み父と^{みこ}御子とより^い出で、^{ちち}み父と^{みこ}御子とともに^{らいはい}礼拝され、^{よげんしゃ}あがめられ、^{よげんしゃ}預言者を通して^{かた}語りたもう。我らは、^{ゆいいつ}唯一の^{せい}聖なる^{こうどう}公同の^{しとて}使徒的^{きょうかい}教会を^{しん}信ず。我らは、^{つみ}罪の^{ゆる}赦しのために、^{ゆいいつ}唯一の^{せんれい}洗礼を^{こくはく}告白す。我らは、^{しにん}死人の^{よみがえり}と、^き来たる^よべき^{いのち}世の^ま命とを^{のぞ}待ち望む。アーメン。

献 金 (黒) 教会活動・(赤) 聖書協会 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

(夏期特別プログラム)

聖書朗読 ゼファニヤ3章14-20節(旧約 p.1474)

コロサイ2章20-23節(新約 p.371)

説教・祈祷 「けして無くならないもの」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 59:1-2

1. わが行くみち いついかに なるべきかは つゆしらねど、主はみこころ なしたまわん。

(おりかえし) そなえたもう 主のみちを ふみてゆかん ひとすじに。

2. こころたけく たゆまざれ、ひとはかわり 世はうつれど、主はみこころ なしたまわん。

(おりかえし) アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

^{てん}天に^{われ}まします^{ちち}我らの父よ

^{ねが}願わくは^{みな}御名を^{あがめ}あがめ^{させ}させた^{まえ}まえ

^{みくに}御国を^{きた}来たら^せさせた^{まえ}まえ ^{みこころ}御心の^{てん}天になる^{ごとく}ごとく ^ち地にも^なな^{させ}させた^{まえ}まえ

^{われ}我らの^{にちよう}日用の^{かて}糧を ^{きよう}今日も^{あた}与えた^{まえ}まえ

^{われ}我らに^{つみ}罪を^{おか}犯す^{もの}者を^{われ}我らが^{ゆる}赦す^{ごとく}ごとく ^{われ}我らの^{つみ}罪をも^{ゆる}赦した^{まえ}まえ

^{われ}我らを^{こころ}試みに^あ会わ^せせず ^{あく}悪より^{すく}救い^{いだ}出した^{まえ}まえ

^{くに}国と^{ちから}力と^{さか}栄えとは ^{かぎ}限りなく^{なんじ}汝のもの^{なれば}なればなり アーメン。

* 頌 栄 63

あめつちこぞりて かしこみたたえよ、みめぐみあふるる 父、み子、みたまを。アーメン

* 祝 祷

後 奏 (黙祷)

報 告 古澤純一長老 (司会・受付 次週：門脇陽子長老)

本日 受付 1階：藤井牧子・古澤迪子執事 2階：加藤良明執事 / ZOOMホスト・録音：番
場験也

次週 受付 1階：那珂信之・星野房子執事 2階：大日南信也執事 / ZOOMホスト・録音：
森永翔馬

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

コロサイ2：20-23「決して無くならないもの」

パウロ先生に叱られる？

ただいまお読みしたところはかなり短い個所です。それから、内容としまして「何で」という問いかけの言葉になっているのは明らかです。本当はこうなるはずなのに、そうっていない、何で、とパウロは尋ねているのです。コロサイの諸教会のどの程度の人たちがそうであったのかは分からないのですが、どうもあまり望ましくない状況があったようなのです。それで、パウロは「何で」と言っている、叱っている、とも取れそうなところなんです。それで私たちは、叱られる、というのはあまり好きではないのです。耳が痛い話は聞きたくないのです。けれども箴言には「論しを守る人は命の道を歩み／懲らしめを捨てる者は踏み誤る（10：17）とあります。そういうわけで今日は、パウロ先生のお叱りの言葉に聞く、といった感じかもしれませんが、少々、考えさせられる言葉に耳を傾ることをしてみたいのです。

お勤めはいけない

それでこのところでパウロが言いたいことを一言で表すとすればそれは「お勤めではいけない」ということではないかと私なりに理解しています。その場合の「お勤め」とは、〇〇することになっている、というものです。例えば私たちに引き寄せてみますと、聖書を読むことになっている、お祈りすることになっている、礼拝に行くことになっている、説教をすることになっている、説教を聞くことになっている、といくらでもいえるのですが、このような義務があるからそれをする、というような捉え方です。ただし、このようなことが全く無意味なのか、とえばそうとばかりも言えません。こんなことを言っただけですが、例えば日曜日の朝目が覚めて、ああ、今日はちょっと教会行く気がしないな、と思いつつも、まあ、習慣だからと礼拝に集まって、参加しているうちに不意に語られた言葉が思いがけず心に届いた、といったことは十分にありうるからです。その意味で、良い習慣を持つことは意味のあることです。けれども、ここで問題となっているのは、おそらく、私たちの心構え、ものの考え方、その出発点です。こういう理由で、こうだから、こうする、というような心の動きです。私たちは何をすることにしまして、色々考えているもののようなのです。なぜあなたはそうするのか、その本音の所がどうなのか、とパウロは問うのです。とはいえ、もう少し具体的な話がすでにここで語られていますから、それに即して考えてみます。

手を付けるな、とは？

それで、20節では、基本的な生き方として、二つのあり方があるということが言われています。それは、イエス様と一緒に死んだものとしての生き方、もう一つは、世に属しているかのような生き方です。それで、この世に属しているような生き方、というほうが先ほどお話ししました、お勤め的ありかた、ということになります。その具体的なありかたとして、20節後半に続いているのが21節の言葉です。大変短い戒めのようなところなんです。「手を付けるな、味わうな、触れるな」です。最初の触れるな、という言葉は、少々言いにくいのですが、夫婦の営みの意味があります。それをしない、それから、おいしいものも食べない、むしろ断食する、自分を楽ませるようなものには触れないようにする、というあり方です。一言で言えば禁欲的生き方です。世の楽しみから離れようというのですから、こちらがキリスト教的生き方のような気がします。けれどもパウロは、こちらの方が、世に属している生き方だ、と言いたいようです。それは逆ではないか、と言いたくなります。けれども、間違いなくパウロはそのように主張するのです。それで、ちょっと混乱するのですが、ただ、パウロは、ここで享乐的な生き方、ルール無視でどどん楽しめ、と言っているわけではないのは確かです。

禁欲は必要、不必要？

例えば、もう少し後の3章に入りますと、コロサイの人たちの以前の生き方として、異邦人として、神様を知ることなく、律法を知ることなく、勝手気ままな生活をしていた状態であったことを戒める言葉を語っています。「地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。」（3：5）あるいは「あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。」と言っています。あきらかに自分勝手な生き方、欲望丸出しの生き方がキリスト者らしくないのは間違いありません。そのうえで、

今日の所では、「戒律に縛られているのですか」と問いがたてられます。禁欲という戒律に縛られてもダメだということです。それではどうしたらいいのか、どうするんですかパウロ先生、と言いたくなります。そこであらためて、何でそうするのか、私たちの心の中で、こうして、こうだから、こうする、という理屈が問われるのです。この場合でしたら、なぜ、禁欲するのかです。その場合にこの禁欲という戒律の出どころとしてパウロが考えているのが、次の22節です。

目の前にあるもののため

「これらは皆、使えばなくなってしまうもの」についての教えだ、と言います。ちょっとわかりにくい言い方です。使えばなくなってしまうものとは、この世にあるものです。私たち人間を含めて、今あってもやがて失われてしまうものです。コロサイではやっていた禁欲のルールは、一見すると信仰的に見えるけれども、それは、本当の信仰から出たものではない、ということです。ではどこから出たのか、と言いますと「人の規則や教えによる」とつづいています。そこで、一つのことを明らかになります。コロサイ書で問題となっていた禁欲の教え全体は、そもそも人間が、うまく生きていくことを目的にしたものだ、ということです。ここで注意したいのは、この後23節では、18節にも登場した「偽りの謙遜」という言葉が登場することです。18節では、偽りの謙遜と天使礼拝、という言葉が結び付けられていました。さらに、この天使礼拝とは、この世の霊を拝む、あるいは恐れる、そのような信仰態度のことでした。そして問題の本質はここにあるのです。それはもっとはっきりと言えば、この世の様子を恐れる、とりわけ人の目を畏れる、ということです。そもそも、この世の霊というのは得体のしれないものです。雰囲気のようなものです。私たちは場の空気とか雰囲気とか言ったりします。しかし、それはいつでも、人と人、私とあなたの間、或いは私たちとその他大勢の間にあるものです。それはどこまで行っても、相対的で気まぐれな、まさに雰囲気以上のもではありません。この雰囲気、人の目を恐れて、キリスト者らしく振舞う、自分でルールをつくって、それに従う、ということをするとなら全部人間同士の間で完結するのです。でも、それは間違っている、それはフリでしかない、とパウロは言います。

独りよがり

とはいえ、私たちは、やはり、世間が怖かったり、人のうわさを気にしたりします。この世の中での評判、自分の置かれた立場を気にします。社会的な地位を気にします。年取を気にします。持ち物を気にします。それで人からどう見られるかを気にします。そうして、この世で勝ち組かどうかを気にします。そしてこのような私たちの心の動きがすべて悪い、と言い切ってしまうてよいか、私自身迷うところです。けれども一つだけ確かなことがあります。それは、私たちがもし信仰者であるのなら、この世で勝ち続けることを第一の目標にしていくのはおそらく正しくないのです。なぜなら、私たちは、20節にありますように「諸霊とは何の関係のないもの」に理論上なっているからです。イエス様を信じたその時から、この世の霊、この世でうまくいくかどうか、とは関係のない者になっているということです。でも、それでもこの世のことが気になって仕方がない、この世での勝ち負けが気になって仕方がない、それが私たちの現実の姿かもしれません。しかし、そこで、なおこの聖書の言葉は、決定的なことを確認しているのです。

キリストと死ぬ、生きる

それは「あなた方はキリストと共に死んだ」という言葉です。これは洗礼を受けた時に何が起きたのかを語る言葉です。私たちは、洗礼を受けたときに、この世のものとしては、死んだ、ということです。さらに、ローマ書にはこんな言葉があります。「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることもなると信じます。」(6:8)。私たちは、この世の様々なしがらみから、少なくとも、信仰の目から見れば、解放されているのです。自由になっているのです。それはこの世の様々なものに対して死んでいるからです。私たちは、色々なところで、勝ちたいのです。勝って、勝って、勝ち続けてそれでも満足できず、なお、勝ち続けたいのです。けれどももうそのような勝ち続けなければ、というこの世の霊の叫びに対しては死んだものとなっている、自由なものになっているのではないか、とパウロは言うのです。

我々の勝利—既に勝っている

ところで今日は旧約聖書のゼファニヤ書を読みました。その中にこのような言葉があります。「お前の主なる神はお前のただ中におられ／勇士であって勝利を与えられる。主はお前のゆえに喜び楽しみ／愛によってお前を新たにし／お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。」（3：17）。この中で特に注目したいのは、「主なる神はお前のただなかにおられ」という言葉です。イエス様を信じたときから、私たちのただなかに神様がいるようになったのです。その神様は「勇士であって勝利を与えられる」と続きます。神様こそが勝って、勝って、勝ち続けられる方です。すべてに打ち勝たれる方です。その神様が私たちと共にいるのです。それゆえ、私たちは、神様の勝利に包まれているので、世の雰囲気や、世の規準を、世における勝ち負けを気にし続ける必要はなくなっているのです。

喜びの歌

それどころか、このゼファニヤ書によりますと、神様は私たちのゆえに喜びの歌を歌って楽しめる、とあります。私たちはこのような神様の喜びの中に入れられているのです。それが最も強く示されるのは、まさにこの礼拝においてです。礼拝において、神様ご自身の言葉、「お前を新たにし、お前のゆえに喜びの歌を歌って楽しむ」という声の響きを聞くのです。まるでこれは、ラブソングのようです。君がいるからうれしくてたまらない、と神様は私たちに呼び掛けておられるのです。そして、私たちの行動の原点はいつでもここにしかないのです。なぜ、これをこうしてやっているのか、なぜ、礼拝をしているのか、なぜ、賛美をするのか、なぜ、祈るのか、なぜあえて禁欲的に生きるのか、それは神様がわたしを喜んでくれているからです。それ以外の理由はないのです。

決して無くならないもの

私たちには決して無くならないものがあります。それは、勝利の神様の愛です。そのしるしこそがイエス様ご自身です。わたしたちがイエス様を信じたときから、勝利の神様の愛は私たちのものとなりました。そうであるからこそ、私たちは、すでに神様の勝利に連なるものとなっています。この世あって、私たちはすでに勝利者です。これこそが決して無くならない私たちの土台です。

祈り

主イエス・キリストの父なる神様。聖名を賛美します。あなたはご自身の民を時に適って呼び集めてくださいます。私たちもまた、あなたに呼ばれてみ前に集うものとされました故に感謝します。そればかりでなく、私たちの恥や苦しみをすべてぬぐってくださり、私たち自身を喜びと楽しみとしてくださっています。このあなたの喜びをわたしたちが共に喜ぶものとさせてください。この週の歩みも、あなたの喜びと勝利とが共にありますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。